

「傾聴のススメ」

先週の礼拝では、宇宙が出来た時の話をしましたが、今日は言葉が出来た時の話から始めたいと思います。個人的な感想ですけど、なんでも「始まり」にまで思いを馳せてみると、なんだか不思議な気つきがあるような、そんな気がします。では、今日は言葉について。言葉は、鳴き声から進化した、と言われていて、多分、それで間違いないとは思いますが。でも、世界には、今も昔も多くの鳴き声を持つ生き物が存在していて、ある瞬間に、自分の耳に届く鳴き声を、それが自分に向けられた特別な鳴き声だ、と判断するに至った理由というものがあるはず。また、それ以前に、鳴き声と、雨音を区別し出したのはいつからなのか。木々が擦れる音は自分には無関係な音で、ある一定の鳴き声を自分と関係のある音であると認識するようになったのは、どうしてなのか。その辺りのことを考える必要があります。「鳴き声から進化して、言葉が生まれた」理論は妥当そうに思えて、結構、詰めないといけない穴が多々あります。私たちだけでなく、多くの動物たちが、自分にとって関係のある音を、この音の溢れる世界から選別して聞き取っています。それは当たり前のように、でも、実は不思議なことです。私が今話しているこの説教と言う音声と、外で響いている風の音や自動車の駆動音は、本質的には単なる空気の振動に過ぎません。だから意思を持たないマイクや、テープレコーダーは、私の声だろうが、外の雑音だろうが、全く選別することなく等しく聞き取ってしまいます。私たちが操る言葉が、他の音と区別され、意味を持つものとされ、今もこのようにして説教と言う形で機能している背景には、非常に重要な大前提があるんだ、ということです。それは、どんな大前提かと言いますと、「私はあなたに伝えたい」という意思があることと、「私はあなたに耳を傾けている」という意思があることです。ここでもう一度、鳴き声の話に戻り

ましよう。まだ、言葉の生まれていない世界にも、愛がありました。愛は、言葉よりも先に生まれていました。鳴き声で語り合う動物たちは、愛する相手を見つめつつ、一生懸命に言葉ではない声を掛けます。言葉ではないから意味は分かりません。でも、聴いている方は、自分に向けて一生懸命に語られている鳴き声を、他の多くの雑音と区別して聞き取るようになります。明らかに自分のためにだけに聞こえてくる鳴き声を、お互いに掛け合い、そうすることで深く固い関係性を築いていきます。その確立された関係性の中で初めて、鳴き声から言葉へと進化していく下準備が整っていきます。「これは聞くに値する声だ」と気づき、「何を伝えたいのだろうか」と考え、「あなたの言いたいことは、こういうことなのか」と確認し、「気持ちが伝わるのって嬉しいね」と喜び合い、言葉は育まれてきました。言葉を、その他多くの雑音から切り離して、意味あるものとしたのは、原初から存在した愛である、なんて言うところちょっと格好付け過ぎかも知れませんが、でも、「大切なあなたに伝えたいことがある」という特別な心の動きが無ければ、言葉は生まれなかったと思います。

ただ、この言葉には、致命的な欠陥と言いますか、越えられない限界があります。それは、言葉は全て要約だと言うことです。要約とは、長い文章を、短くまとめて読みやすくする、ということですね。読みやすくするなら良いじゃないかと思うかも知れませんが、読みやすくするために削られ、失われた意味や情報は、相手には伝わりません。私たちは、肌と心で感じた膨大な情報を、頭で思考して、相手に伝わりやすいような言葉にキュッとまとめて発信しています。膨大な情報と言うのは、例えば「痛い！」と感じた場合、それがどれくらい「痛い」のかを正確に伝達しようと思ったら、本来、一言二言では済まないということです。病院に行かなきゃ行けないほど痛いのか、ちょっと話題が欲しくて「熱い」と言ってみただけなのか、心配して欲しくて言ってみただけなのか。人の感情は複雑なものです。私たちの感じたことや、思ったことや、考えたことは、言葉にし

た時点で、すでに要約された欠けだらけ情報です。ただ、もしも、そんな欠けだらけの言葉のやり取りが嫌なら、ちゃんと方法はあります。それは、法律文のように、契約書のように、哲学書のように、長たらしく隙のない言葉を語ればいいのです。法律文も、契約書も、哲学書も、勘違いや誤解や認識のズレを極力排除するために、あんなにも長くて難しい書き方をしているんですね。だから、私たちも、自分の言いたいことを可能な限り完璧に伝えようと思うなら、長くて複雑な言葉になってしまうことを避けない方が良いでしょう。まあ、日常生活で法律文のような会話って無茶ですけどね。

だから、私たちは、自分の言葉には欠けがある、自分の話していることは、完全には相手に伝わることはないと弁えている必要があります。また、逆に言えば、相手の言葉にも欠けがあり、相手の話していることは、完全には自分も理解できるわけじゃないと弁えている必要があります。言葉というコミュニケーションのための道具を使う以上、誤解やすれ違いは仕方ないことなんです。それは、人対人のコミュニケーションでもそうですが、神様との関係においても同じです。神様の御言葉も、私たちが理解できる言葉に翻訳されている以上、神様の御心を完全には伝えて切れていません。翻訳と言っても、ヘブライ語から日本語へとか、ギリシャ語から日本語へというレベルの話ではなくて、神様が私たちに理解できるように言葉を選んで、語ってくださっている時点で、神様の豊かな御心、計り知れない御旨は、幾分か失われているということです。いくら聖書のことを勉強して御心を聞こうとしても、この聖書の御言葉も、それが私たちに分かる言葉であるかぎり、完璧ではありません。いくら一生懸命に牧師の説教に耳を傾けようと、それが人間の言葉である以上、聖書の御言葉よりもさらに欠損具合が酷いかも知れません。

だから、大昔の鳴き声を語り合った時代に戻ってみましょう。言葉よりも先に、自分に向けられている愛を感じ取って、耳を傾けていた時代です。神様は、私たちが愛するが故に、御言葉を語っ

てくださいます。私たちに聞いて欲しいと願って、聖書を残してくださいました。まずは、その神様の愛に気付いてみる。その上で、書かれている御言葉に向き合ってみる。すぐに理解できなくても構いません。分からないところがあって当然です。むしろ、神様の御言葉を「分かったつもり」でいる方が危ないでしょう。常に、尋ね求めるのです。そして、尋ね求める中で、スッと腑に落ちる御言葉に出会ったなら、その御言葉を大切に心に留めて置く。そうやって、信仰は養われていくのだと思います。

今日の聖書箇所は、非常に分かり易く神様の御言葉を聞き違えたという出来事を伝えています。神様の御言葉は正しくても、それを聞く人間は間違えるので、サムエルさんのような少々愛嬌のある失態を演じてしまいます。その失態に対して、年長者であるエリさんの助言が加わります。その様子も、私たちの信仰継承の縮図のように感じられます。「戻って寝なさい。もしまた呼び掛けられたら『主よ、お話してください。僕は聞いております』と言いなさい」。このエリさんの助言は含蓄に富んでいます。神様はもう一回声かけてくれるから、とりあえず、戻って寝なさいと。神様の声掛けを3回聞き流しても、別に慌てる必要ってないんですよね。信仰への呼びかけを、何度も何度も聞き流したとしても、神様の招きは終わらない。その招きとは、こちらから大声で求めるものでもなく、神様の方から動いてくださるのをひたすら待つのだと。「果報は寝て待て」という諺のようでもあります。

そして、いざその時が来たなら、「主をお話ください。僕は聞いております」という姿勢を忘れないでいたいと思います。自分のことを愛して、特別に思ってくださいているからこそ、耳に届いた神様の御言葉に、しっかりと向き合いたいと思います。キリスト教にとって聴くことは非常に大切なことです。聖書を読んで御言葉を聴くこともそうですが、ペンテコステに吹いたような風の音を聞いたり、鳥の鳴き声を聞いたり、さざ波を聞いたり、虫の音を聞いたり。そこに神様の愛を感じ

られるなら、全ての音は、私たちにとって聴くに値する御声に変わります。神様の愛を知るっていうのは、世界が広がるということも意味しているかも知れません。神様の御声を知らなかったサムエルさんが、エリさんの助言を受けて、神様との新しい関係性に入っていったように、私たちも神様の愛を知り、受け入れることで、新しい生き方、新しい人生を得られるのかも知れません。それまでは、ただの雑音に過ぎなかった経験が、全く新しい御声のように響いてくるかも知れない。

傾聴のススメです。人と人がより平和に仲良く過ごせるように、しっかりとお互いの言葉を吟味し、耳を傾けること。そして、神様と人がより深く親密に過ごせるように、神様の愛を知り、自分に向けられた御言葉に耳を傾けること。人に対しても、神様に対しても「どうぞお話しください。聞いています」という姿勢を大切にしたいと思います。最後にお祈りを致します。

神さま。あなたは、いつも私たちのために御言葉を語り、御声を掛けてくださいます。今日も、あなたの呼びかけに応じて、私たちはこの礼拝堂に集いました。今日も、共に祈り、共に賛美できる恵みに与ることができ、心から感謝いたします。どうか、神様、今日から始まる1週間も、あなたの御言葉の中を、御声の響きわたる毎日を過ごすことができますように。私たちの耳を強め、心を開かせてください。あなたに耳を傾けつつ過ごす私たちの上に、常に祝福と幸いが注がれますように。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げいたします。